岐阜大学教育学・心理学研究紀要　第11号（1992年）181～192

相手の性別・年齢が対人的葛藤解決に及ぼす効果

名古屋大学大学院教育学研究科　小　森　千　世
教育学科（心理学）　宮　本　正　一

The effects of targets age and sex on the interpersonal conflict resolution

CHISE KOMORI　Nagoya University, Furho-chou, Chikusa-ku, Nagoya 464-01
MASAKAZU MIYAMOTO　Department of Psychology, Faculty of Education, Gifu University, Yanagido, Gifu 501-11

A questionnaire study is conducted to examine the effects of targets age and sex on the interpersonal conflict resolution. Subjects were 485 students of Gifu University consisting of 169 males and 116 females. The questions were asked how strongly they feel angry ; if they feel puzzled how to act ; and whether they act immediately when they were faced with 3 interpersonal conflict situations. There was fairly clear sex difference in how to accept the situations. And the effects of targets age and sex were found. Subjects were likely to complain directly to target person when young and to repress dissatisfaction when old. Furthermore, subjects were likely to complain directly when target was of the same sex and to repress dissatisfaction when target was of the opposite sex. However these effects were remarkable on the male subject.

Key words : interpersonal conflict , conflict resolution , sex difference

葛藤（conflict）は，「2つ以上の対立する傾向がほぼ等しい強さで同時に存在し，行動の決定が困難な状態」（心理学事典）と定義されている。これまで葛藤の研究で取り上げられてきたのは，主に対人関係における葛藤である（池内，1971；三上，1976）。まず実験ゲームによる葛藤研究では，被験者が得る利得に関する協同と競争の葛藤が研究されてきた。実験の目的に合わせて利得構造を変化させる等の方法で，様々なゲームを作ることが出来るため，数多くの研究が報告されてきた。

しかし実験ゲームは単純すぎて，そこで得られた結果を現実世界の葛藤場面へと適用出来るのかという疑問も出されてきた。そして，より実際的な場面での葛藤をとらえようとする研究が出てきた。その手続きの多くは被験者の自由記述した回答から要因を抽出するというものが多い。このような研究ではどの様な葛藤状態にあるのかというよりも，生じた葛藤をどのように解決しているのかということに研究の関心・焦点がおかれている。

Sillars（1980）は通常の対人関係における葛藤解決方略に焦点をあてている。そして，方略を①受動的・間接的（passive-indirect），②個別的（distributive），③統合的（integrative）の3種類に分類している。

①の受動的・間接的方略は，葛藤の率直な認知（explicit acknowledgment）や葛藤についてのコミュニケーションを最小限にするというもので，解決するのを待つ，問題を回避する，

無関心，共感的適応，問題となっている人物を避ける，暗示，例示，冗談化の8種類の方略からなる。

②の個別的方略は，譲歩(conssesion)を求めたり，相手について否定的な評価を述べることによって個人が双方の成り行きを支配しようと試みる話し合いであり，要求（requesting ; demaning)，説得，攻撃的情動を示す，脅迫といった5種類の方略からなる。

③の統合的方略は，相互的結果を促進するというもので，開示（disclosure)，問題解決の2種類の方略からなる。

Sillars（1980）はウィスコンシン大学の1年生の寮生を対象に郵送調査を行っている。質問内容は，ルームメイト間で経験した対人問題（interpersonal problem）の中で最も重要なものを想起し，生じた問題やその他の変数（例えば，ルームメイトへの満足度等）を8件法で評定させた。その結果，一番よく使われる解決方略は，受動・間接方略（52%）で，次いで個別的方略（29%)，統合的方略（19%）であった。

Sillars（1980）の提唱した3つの葛藤解決方略に対して，アプローチが先験的で，包括性や代表性が不明確であるという批判が出された。それらの批判を克服しようと，藤森（1989）は多次元尺度構成法を活用して，解決方略の客観的次元を抽出しようと試みている。

藤森（1989）は，男子寮に住む学生を対象に面接調査を行った。面接では，寮生活における対人的なことでの不愉快な経験の有無を尋ね，有る場合は，いつ・どこで・誰と・どんな問題が生じたのか・その時どのように行動したのかについて質問を行った。また，葛藤についての認知に対する評定も行った。

これらの回答の類似性を複数の判定者に7件法で評定させた。それをもとに多次元尺度構成法による分析を行った。そこから，コミュニケーションの促進性に関する次元と個別的・協調的解決を両極とする葛藤解決の方向に関する次元を見出した。そして，この2次元によって得られる象限を①抑制・個別型，②抑制・協調型，③促進・個別型，④促進・協調型とした。

①の抑制・個別型の方略は，「相手の回避」「無行動」「暗示」などの，葛藤に関する自分の要求等を全く表明しない，もしくは間接的にしか表明せず，個人的解決を図ろうとする方略のことである。

②の抑制・協調型の方略は，「表面的同調」等，葛藤に関する自分の要求等は直接には表明せず，相手の利益となるような解決を図ろうとする方略のことである。

③の促進・個別型の方略は，「要求」「命令」「説得」等，葛藤に関する自分の要求を直接的に表明する，または相手の否定的評価を述べることにより，個人的な利益を求めようとする方略のことである。

④促進・協調型の方略は，「協力的提案」「相手への接近」等の，葛藤に関する自分の要求は表明するが，相手の否定的評価を述べるようなことはせず，相互の利益となるような解決策を求める方略のことである。

葛藤解決方略の使用頻度は，抑制・個別型が一番高く（47.1%)，次いで促進・個別型（20.6%)，抑制・協調型（19.6%)，最も低かったのが促進・協調型（12.7%）であった。

解決方略の規定要因として相手（先輩・同輩・後輩）や対人葛藤の認知（責任の所在等）をとりあげ分析している。相手についての分析では，抑制・協調型の方略と促進・個別型の方略で葛藤の相手との間で有意差が認められた。

先輩との間の葛藤では抑制・協調型の方略の使用頻度が増加していた。つまり，問題について話し合うというような行動はとらないで，先輩の望むような結果になるように行動する傾向にあるといえる。

それに対して，後輩との間の葛藤では促進・個別型の方略の使用頻度が増加していた。相手が後輩である場合には，相手と問題について依頼・要求等を通して自分の望みに近い解決へともっていく傾向にあるといえる。

吉野（1987）は，葛藤の解決過程の分析を試み，社会的葛藤場面として，夫婦・友人・近隣関係を取り上げ，次のような調査を行った。まず主婦を対象に，仮想の葛藤場面における解決行動を回答させる質問紙を作成した。質問内容は，①事態の重要さの認知，②事態への情緒的関わり方，③葛藤の表面化，④解決の基本方針，⑤解決の具体策の決定であった。また，葛藤解決行動に影響を与える要因として過去の葛藤体験と，学歴，年齢，職業の有無，配偶者の有無，家族形態，居住形態，夫の職業，居住地の8項目の身上調査的(demographic)項目と，生活に対する満足度等をとりあげた。

得られた結果の分析により，葛藤の認知から解決行動に至る一連の流れには，かなり明確な類型がみられることを見出した。それは，強硬型・柔軟型・放置である。この3類型は，同一のレベルのものではなく，まず強硬－柔軟型と放置型の2種類に大別され，その後，前者が強硬型と柔軟型に分かれるという階層構造を持つと考えられている。

強硬－柔軟型と放置型を分ける最も大きな要因として，事態の重要さの認知を挙げている。事態の重要性の認知が，事態に関与するかどうかの判断に非常に大きな影響を与え，関与すると決定した後も，解決策は認知された重要性によって影響されることも見出している。

しかし，これらの研究から抽出された要因を独立変数として葛藤解決行動を測定するといった試み（下斗米・飛田・藤森，1988）はまだ数少ないように思われる。そこで本研究では，葛藤の解決行動に影響を与える要因として相手との年齢の違いと性別をとりあげた。相手との年齢の違いと性別は被験者との社会的関係を規定する最も一般的な要因であると思われる。そこで，これら独立変数が葛藤解決行動にどのような影響を及ぼすかについて検討することを目的とした。

そこで先行研究や大渕（1986)，藤森（1989）の研究を参考にして，次のような仮説を立てた。

仮説1：相手が年下の場合には，「文句を言う」等の直接相手に訴える形で対処をし，相手が年上であれば，「我慢をする」といったような形で不満が抑制される。

仮説2：同性に対しては，「文句を言う」等の直接相手にうったえる形で対処をし，異性に対しては，「我慢をする」といった形で不満が抑制される。

方　法

被験者

岐阜大学の学生285名を対象に，無記名調査を行った。そのうち男子学生は169名（工学部90名・農学部28名・教育学部49名・医学部2名)，女子学生は116名（工学部5名・農学部12名・教育学部98名・医学部1名）であった。

調査実施場所と手続き

調査は，教養部と教育学部のそれぞれの教室で行った。講義の始めまたは終わりの25分程度の時間で行った。回答するペースは，回答者にまかせた。ほぼ全員が回答し終えた頃に回収し，終了した。

質問紙の構成

大渕（1986）の研究を参考にして，次のような質問紙を作成した。

葛藤を生じさせると思われる場面を3つ設定した。(1)電車場面：混み合った電車の中で，自分が座っている座席の手すりに人が座った。(2)図書館場面：図書館で勉強していたら，周りの人達のおしゃべりがうるさくて，勉強できない。(3)映画館場面：混み合った映画館だが，よい席に座れた。しかし，前にいる人達がうるさくて気が散る。

このような場面で生じる①感情の程度，②どのような行動をとるかの迷いの程度を5件法（1＝全く思わない，5＝強く思う）で評定させた。②で全く思わないと評定した被験者には，どのような行動をとるか，またその理由を自由記述させた。それ以外の被験者には，いくつかの設定した行動を③どのくらいとりたいかという願望の程度を5件法（同上）で評定させた。そして④実際にとると思う行動を選択させた。また，⑤選択した行動それぞれにあてはまる理由をすべて挙げさせた。

この3つの場面にはそれぞれ，被験者に対し欲求不満を生じさせるような行動をしている人物が登場している。この迷惑な人（target person）は，性別（男性・女性）と年齢（年下・同じくらいの歳・年配）を組み合わせて6種類あり，この6種類の人のいずれかに設定してある。一組の質問紙には，同種の人が入らないようにした。

結　　果

回収した質問紙から記入もれ，回答法が誤っているものを除いた。その結果，最終標本数は電車場面270，図書館場面267，映画館場面272となった。

全体の傾向としては，感情の項目で得点が高かったものは「腹がたつ」，「マナーの悪い人達だ」であった。電車場面では，「腹がたつ」よりも「仕方がない」のほうが得点が高かった。行動の願望の程度では，3場面共通して「心の中で文句を言う」の項目の得点が高かった。電車場面では，「何もしないで座り続ける」の項目の得点が高かったが，その他の2場面では，「移動する」のほうが，得点が高かった。

評定得点における性差，年齢差をみるために，それぞれの感情項目，それぞれの行動の願望得点ごとに，宮本・山際・田中（1991）によって，被験者の性別，相手の性別と年齢（年下・同年齢・年配）の3要因（2×2×3）の分散分析を行った。

①電車場面

電車場面における6種の感情反応に関する分散分析の結果を要約したものを表1に示す。「腹が立つ」感情では相手の性の主効果と被験者の性×相手の性×相手の年齢の二次の交互作用が有意となった。図1に示すように，男性は同性の相手の場合は等しく腹を立て，年配の異性の場合も同様である。しかし年下と同年齢の異性に対してはあまり腹を立てていない。女性は年配の同性の相手の場合はあまり腹を立てないが，年配の異性の場合は逆に一番腹を立てている。

表1　電車場面における感情反応に関する分散分析の要約

		腹が立つ		運が悪い		嬉しい		失礼な人だ		仕方がない		憂鬱	
変動因	df	F	p	F	p	F	p	F	p	F	p	F	p
A（被験者の性）	1	0.28		0.31		20.21	<.001	0.02		0.65		12.89	<.01
B（迷惑な人の性）	1	4.30	<.05	2.33		15.40	<.001	2.27		0.03		0.21	
C（迷惑な人の年齢）	2	0.76		1.37		2.72		1.00		0.68		4.68	<.01
A × B	1	0.29		0.45		20.85	<.001	0.01		2.09		1.72	
B × C	2	0.09		0.34		1.68		0.59		0.30		0.06	
C × A	2	2.85		0.94		3.24	<.05	1.65		1.17		1.41	
A × B × C	2	3.24	<.05	2.78		3.99	<.05	0.75		0.19		2.25	
残差	258												

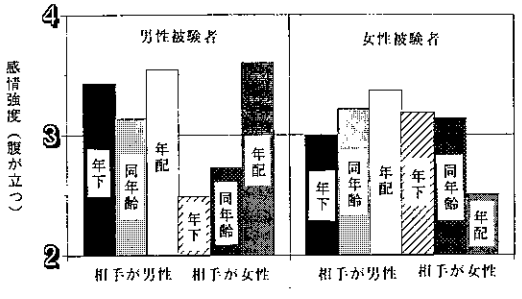

図1　電車場面における『腹が立つ』感情の強さ

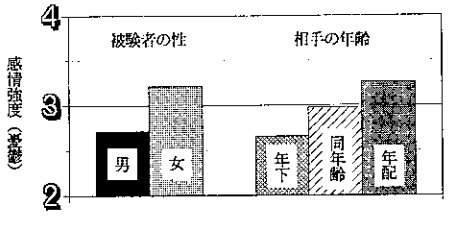

図2　電車場面における『憂鬱』感情の強さ

いる。

「嬉しい」という感情は女性の相手に対する男性の被験者の場合に特に認められ，とりわけ同年齢の場合に顕著であった。

「憂鬱」の項目は被験者の性の主効果，相手の人の年齢の主効果が有意であった。図2に示すように，女性の被験者の方が男性の被験者より強く「憂鬱」になることが分かる。また相手の年齢が高いほど「憂鬱」感が強い。ＬＳＤ法による平均値の多重比較では年少群と年配群の間にのみ有意差（LSD=0.39，p<.05）が得られた。

7種の行動に対する願望得点に関する分散分析の結果を要約したものを表2に示す。「心の中で文句を言う」行動では被験者の性別と相手の年齢の交互作用が有意となった。水準別誤差項を用いた単純主効果検定によれば，図3に示すように，相手が年下の場合（F=2.06，df=1/200）と年配の場合（F=3.71，df=1/200）には被験者の性別の効果は有意ではないが，自分と同年齢の場合には女性の方が男性より「心の中で文句を言う」ことが分かった（F=4.45，df=1/200，p<.05）。

「さり気なく体を押す」行動では被験者の性別と相手の性別との交互作用が有意となった。図4に示すように，同性の人に対してはこの行動が多くなっている。水準別誤差項を用いた単純主効果検定によれば，女性被験者の場合には相手の性別の効果は有意ではないが，男性被験者の場合には女性に対してよりも男性に対してより「さり気なく体を押す」ことが分かった（F=5.25，df=1/200，p<.05）。

「席を立って移動する」行動では被験者の性の主効果と相手の年齢の主効果とが有意となった。図5に示すように，女性被験者の方が男性被験者の場合よりも「席を立って移動」したいと思っていた。また相手の年齢の効果は，ＬＳＤ法による多重比較の結果，相手が年配の場合は年下や同年齢の場合よりも有意に「席を立って移動」したい思うことが分かった。年下条件と同年齢条件間には有意差が得られなかった。

「手すりに座っている人に文句を言う」行動では被験者の性の主効果が有意となった。男性被験者の方が女性被験者の場合よりも「文句を言」いたいと思っていた。

「何もしないで座り続ける」行動では被験者の性と相手の性との交互作用が有意となった。相手が異性の時の方がより「座り続ける」と回答している。水準別誤差項を用いた単純主効果検定によれば，図6に示すように，男性被験者の場合には相手の性別により異なり，女性の場合の方が男性の場合より「座り続ける」傾向（F=3.60，df=1/200，p<.10）にあった。しかし女性被験者の場合には有意差が見られない。

「にらむ」という行動でも被験者の性と相手の性との交互作用が有意となった。水準別誤差項を用いた単純主効果検定によれば，図7に示すように，男性被験者の場合には女性に対してよりも男性に対して，より「にらむ」行動をとりたいと思っていた（F=8.01，df=1/200，p<.01）。しかし女性被験者の場合には有意差が見られない。

②図書館場面

6種の感情反応に関する分散分析の結果を要約したものを表3に示す。「腹が立つ」感情では被験者の性と相手の年齢との交互作用，被験者の性×相手の性×相手の年齢の二次の交互作用が有意となった。図8に示すように，男性の被験者は同性の相手の場合にはその年齢のいかんを問わず腹を立て，相手が女性の場合には年配の場合にのみ「腹を立てる」パターンを示した。女性は年配の同性の相手の場合に限ってあまり腹を立てない傾向がうかがえる。これは電車場面と似た結果パターンであった。

「憂鬱」という感情は被験者の性の主効果が認められ，女性の被験者の方が「憂鬱」になる傾向が強い。これも電車場面と同様のパターンであった。

「マナーが悪い人だ」という項目は被験者の性×相手の性の交互作用が有意であった。水準別誤差項を用いた単純主効果検定によれば，図9に示すように，男性の被験者は相手が男性の

表2　電車場面における行動の願望得点に関する分散分析の要約

変動因	df	心の中で F	心の中で p	体を押す F	体を押す p	移動する F	移動する p	文句を言う F	文句を言う p	何もしない F	何もしない p	八つ当たり F	八つ当たり p	にらむ F	にらむ p
A（被験者の性）	1	0.87		0.16		4.74	<.05	11.63	<.01	0.29		0.02		0.10	
B（迷惑な人の性）	1	1.35		0.88		2.74		2.92		0.25		0.49		3.70	
C（迷惑な人の年齢）	2	2.21		2.61		4.38	<.05	0.15		0.63		0.87		0.32	
A × B	1	0.67		5.30	<.05	0.23		0.02		4.76	<.05	0.00		4.31	<.05
B × C	2	1.03		0.94		0.83		0.42		1.64		1.98		0.12	
C × A	2	4.67	<.05	0.78		0.18		0.51		0.42		0.08		0.67	
A × B × C	2	2.87		0.12		0.47		0.29		0.20		0.53		2.81	
残差	200														

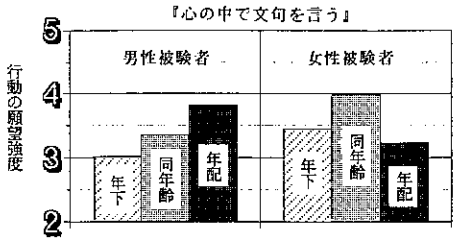

図3　電車場面における『心の中で文句を言う』行動の願望強度

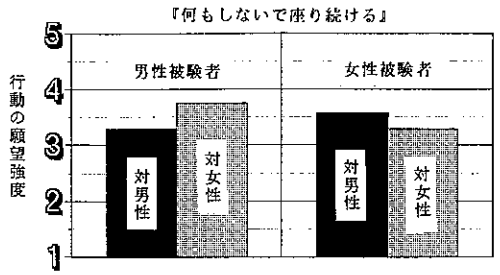

図6　電車場面における『何もしないで座り続ける』行動の願望強度

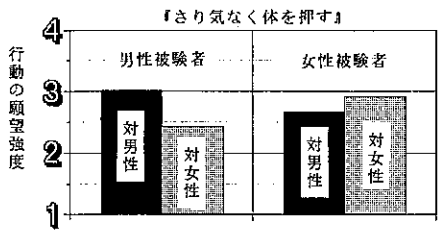

図4　電車場面における『さり気なく体を押す』行動の願望強度

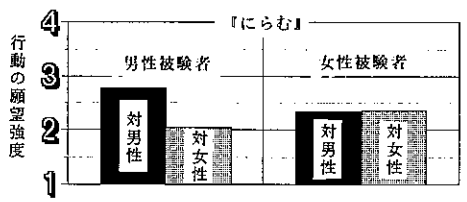

図7　電車場面における『にらむ』行動の願望強度

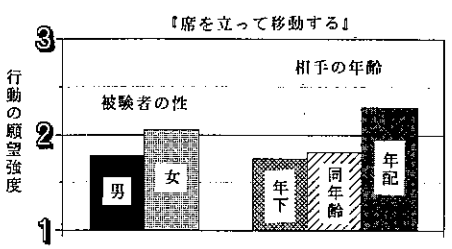

図5　電車場面における『席を立って移動する』行動の願望強度

場合により強くそう思うこと（F=10.35, df=1/255, p<.01）が分かる。しかし女性被験者の場合は相手の性別の効果は有意ではない。

また被験者の性×相手の年齢の交互作用が有意であった。水準別誤差項を用いた単純主効果検定によれば，男性の被験者の場合には相手の年齢の効果が有意（F=4.31, df=1/255, p<.01）である。つまり年配者の時に「マナーが悪い人だ」と思う傾向が強かった。これに対し，女性の被験者は相手の年齢の効果は有意ではない。

表3　図書館場面における感情反応に関する分散分析の要約

変動因	df	腹が立つ F	腹が立つ p	憂鬱 F	憂鬱 p	運が悪い F	運が悪い p	マナーが悪い F	マナーが悪い p	悲しい F	悲しい p	座らなければ F	座らなければ p
A（被験者の性）	1	2.26		6.20	<.05	1.29		1.46		1.55		50.45	<.001
B（迷惑な人の性）	1	2.22		0.38		1.30		3.36		3.15		2.95	
C（迷惑な人の年齢）	2	0.25		0.59		1.08		1.26		1.31		0.31	
A × B	1	3.36		0.00		0.38		7.38	<.01	0.73		0.02	
B × C	2	0.40		1.20		2.56		0.03		0.32		2.84	
C × A	2	7.70	<.01	0.36		1.78		3.91	<.05	6.51	<.05	4.08	<.05
A × B × C	2	8.14	<.01	0.85		1.37		2.04		1.08		2.35	
残差	255												

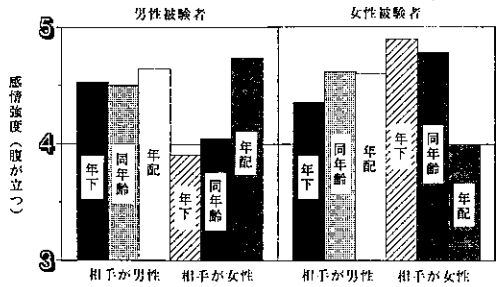

図8　図書館場面における『腹が立つ』感情の強さ

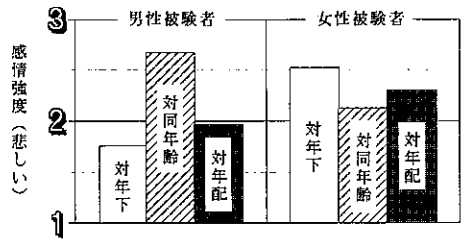

図10　図書館場面における『悲しい』感情の強さ

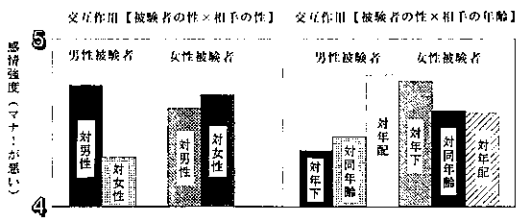

図9　図書館場面における『マナーが悪い人達だ』と思う強さ

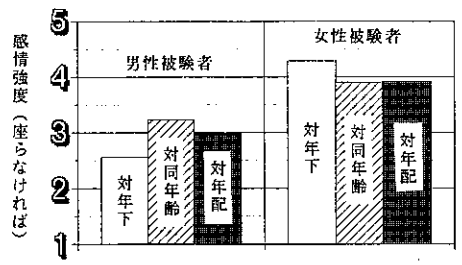

図11　図書館場面における『ここに座らなければよかった』と思う強さ

「悲しい」という感情項目は被験者の性×相手の年齢の交互作用が有意であった。水準別誤差項を用いた単純主効果検定によれば，図10に示すように，男性の被験者は相手の年齢により異なり，同年齢者に対してより強く思うこと（F=6.68, df=1/255, p<.01）が分かる。女性の被験者の場合は統計的に有意差はない。

「ここに座らなければよかった」という項目は被験者の性の主効果が認められ，女性の被験者の方が得点が高い（図11）。被験者の性別と相手の年齢との交互作用も有意となった。水準別誤差項を用いた単純主効果検定によれば，男性被験者の場合（F=3.12, df=1/255, p<.05）にのみ，相手が同年齢の場合には年下の場合より「ここに座らなければよかった」と感じることがわかった。女性の被験者の場合は統計的に有意差はない。

7種の行動に対する願望得点に関する分散分析の結果を要約したものを表4に示す。

「我慢する」という項目では相手の性の主効

表4　図書館場面における行動の願望得点に関する分散分析の要約

変動因	df	心の中で F	心の中で p	文句を言う F	文句を言う p	ぐちをこぼす F	ぐちをこぼす p	我慢する F	我慢する p	移動する F	移動する p	八つ当たり F	八つ当たり p	にらむ F	にらむ p
A（被験者の性）	1	0.60		2.43		1.29		0.88		24.34	<.001	0.08		3.41	
B（迷惑な人の性）	1	0.22		0.63		1.30		9.60	<.01	0.34		0.18		0.63	
C（迷惑な人の年齢）	2	0.14		1.16		1.08		1.78		2.83		0.92		3.78	<.05
A × B	1	0.92		0.13		0.38		0.13		0.72		0.13		0.20	
B × C	2	0.68		0.18		2.56		0.43		0.94		0.51		1.21	
C × A	2	0.70		1.99		1.78		0.62		2.74		0.06		0.10	
A × B × C	2	0.21		1.24		1.37		0.11		2.27		0.12		5.76	<.01
残差	213														

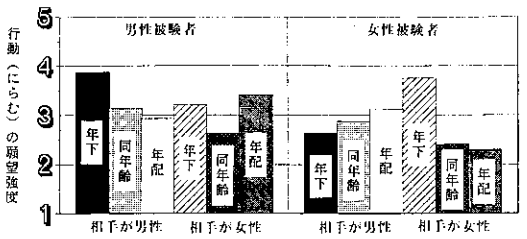

図12　図書館場面における『にらむ』行動の願望強度

果が認められ，女性の相手に対しての方が得点が高かった。

「座席を移動する」という項目では被験者の性の主効果が認められ，女性の被験者の場合の方が得点が高かった。

「にらむ」という行動では相手の年齢の主効果と被験者の性×相手の性×相手の年齢の二次の交互作用が有意となった。男性被験者の場合には相手が年下の男性の場合に一番得点が高く，相手が女性の場合には同年齢の場合に一番得点が低い。女性の被験者の場合には，相手が異性の男性の場合には年齢が高くなるにつれて「にらむ」得点が高くなる一方，相手が同性の女性の場合には年下の相手に対して，より「にらむ」行動をとりたいと思っている（図12）。

③映画館場面

6種の感情反応に関する分散分析の結果を要約したものを表5に示す。「腹が立つ」感情得点は概して高い値を示している。被験者の性と相手の年齢との交互作用，被験者の性×相手の性×相手の年齢の二次の交互作用が有意となった。図13に示すように，男性の被験者は同性の相手の場合にはその年齢の上昇につれて得点が次第に高くなり，相手が異性の女性の場合には同年齢の場合に得点が高くなり，年配の場合には低くなっている。女性の被験者は相手が異性の相手の場合には年齢が若いほど「腹が立つ」としている。同性の女性の場合には年下と年配者に対して特に高い値を与えている。この結果パターンは電車場面，図書館場面とは少し異なっている。

「憂鬱」という感情は被験者の性の主効果が認められ，女性の被験者の方が高かった。これは電車場面，図書館場面と同様である。

「悲しい」という感情項目は相手の年齢の主効果と被験者の性×相手の性の交互作用が有意であった。図14に示すように，相手の年齢が高ければ高いほど「悲しい」感情が強くなっている。ＬＳＤ法による多重比較では年下と年配との間にのみ有意差が得られている。被験者の性と相手の性の交互作用に対する水準別誤差項を用いた単純主効果検定によれば，男性の被験者の場合は有意差はないが，女性の被験者は相手が男性の場合に，有意（$F=8.16$, $df=1/255$, $p<.01$）に「悲しい」と思っている。

「ここに座らなければよかった」という項目は被験者の性の主効果が認められ，女性の被験者の方が得点が高い（図15）。この点は図11の図書館場面と同様である。被験者の性×相手の

表5　映画館場面における感情反応に関する分散分析の要約

変動因	df	腹が立つ F	腹が立つ p	運が悪い F	運が悪い p	マナーが悪い F	マナーが悪い p	憂鬱 F	憂鬱 p	悲しい F	悲しい p	座らなければ F	座らなければ p
A（被験者の性）	1	0.16		1.81		1.41		6.80	<.05	2.08		12.21	<.01
B（迷惑な人の性）	1	3.24		0.57		0.45		2.49		0.75		0.48	
C（迷惑な人の年齢）	2	0.06		1.99		2.11		1.75		3.22	<.05	1.30	
A × B	1	0.20		0.52		2.07		1.88		10.09	<.01	0.20	
B × C	2	0.11		0.85		2.50		1.61		0.83		0.43	
C × A	2	3.99	<.05	0.42		1.39		2.13		1.96		2.90	
A × B × C	2	7.48	<.01	0.59		0.63		0.50		0.18		4.37	<.05
残差	255												

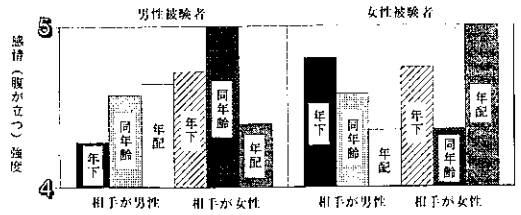

図13　映画館場面における『腹が立つ』感情の強さ

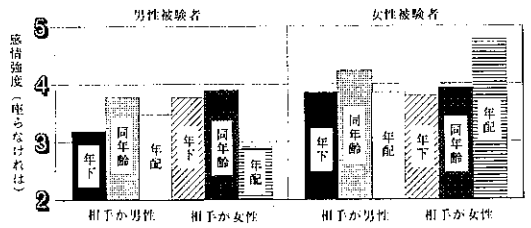

図15　映画館場面における『ここに座らなければよかった』と思う強さ

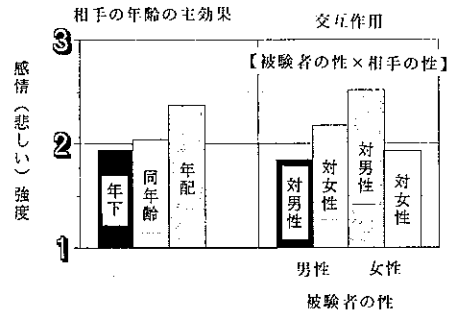

図14　映画館場面における『悲しい』感情の強さ

性×相手の年齢の二次の交互作用が有意となった。図15に示すように，相手の年齢が同年齢の時，一番得点が高いが，女性の被験者が同性を見る場合にのみ，年配者条件が一番得点が高かった。

8種の行動の願望得点に関する分散分析の結果を要約したものを表6に示す。

「心の中で相手に文句を言う」という項目では被験者の性の主効果と相手の性の主効果が有意となった（図16）。つまり男性の被験者の方が得点が高く，また相手が男性の場合の方が得点が高かった。

「後で友達にぐちをこぼす」という項目でも被験者の性の主効果が有意となり，女性の被験者の方が得点が高かった。

「椅子の背をける」という項目でも同様に，被験者の性の主効果が有意となり，今度は男性の被験者の方が得点が高かった。

さらに「席を移動する」という項目でも被験者の性の主効果が有意となり，女性の被験者の方が得点が高かった。

「我慢をする」という項目では相手の性×相手の年齢の交互作用が有意であった。水準別誤差項を用いた単純主効果検定によれば，相手が女性の場合（$F=3.38$, $df=1/223$, $p<.05$）にのみ相手の年齢の効果が有意であった（図17）。つまりＬＳＤ法による多重比較では年下と年配との間にのみ有意差が得られている。

「にらむ」という行動では相手の性の主効果が有意となった。また相手の性×相手の年齢の

表6　映画館場面における行動の願望得点に関する分散分析の要約

変動因	df	心の中で F	心の中で p	文句を言う F	文句を言う p	ぐちをこぼす F	ぐちをこぼす p	椅子の背をける F	椅子の背をける p	席を移動する F	席を移動する p	八つ当たり F	八つ当たり p	がまんする F	がまんする p	にらむ F	にらむ p
A（被験者の性）	1	0.46		10.29	<.01	9.31	<.01	4.60	<.05	8.89	<.01	1.85		1.13		0.26	
B（迷惑な人の性）	1	0.03		4.80	<.05	0.22		1.01		0.01		0.16		0.07		4.00	<.05
C（迷惑な人の年齢）	2	0.03		0.12		1.27		2.21		0.88		2.78		0.61		2.64	
A × B	1	0.13		0.74		2.33		0.03		0.20		0.28		0.03		0.05	
B × C	2	0.97		0.23		0.32		0.07		0.15		1.10		3.38	<.05	3.25	<.05
C × A	2	1.27		0.73		0.43		2.89		0.09		1.26		0.26		0.31	
A × B × C	2	1.40		0.64		0.99		0.94		0.01		0.21		0.16		2.82	
残差	223																

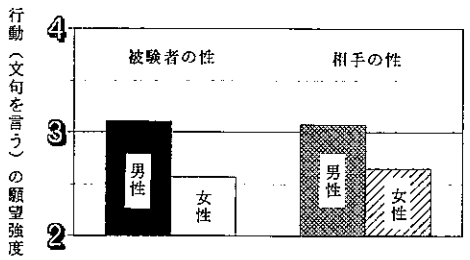

図16　映画館場面における『心の中で文句を言う』行動の願望強度

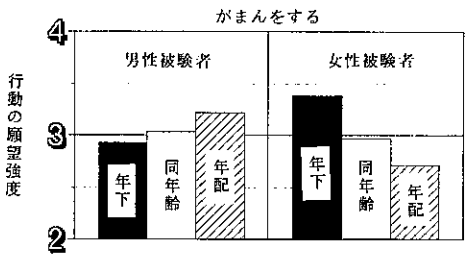

図17　映画館場面における『がまんをして観続ける』行動の願望強度

交互作用が有意となった。水準別誤差項を用いた単純主効果検定によれば，相手が年下の場合（F=9.34，df=1/223，p<.01）にのみ相手の性の効果が有意であり，相手が女性の場合には得点が低かった（図18）。

対処行動の決定における迷いの項目では，電車場面・図書館場面・映画場面ともいずれも有意差の得られたものはなかった。

対処行動の実行水準において選択数が多かったのは，「心の中で文句を言う」「にらむ」「移動する」（図書館場面・映画館場面）「何もしない」（電車場面）の項目であった。また，女性の被験者では，「後で友達に愚痴をこぼす」の項目も選択数が多かった。

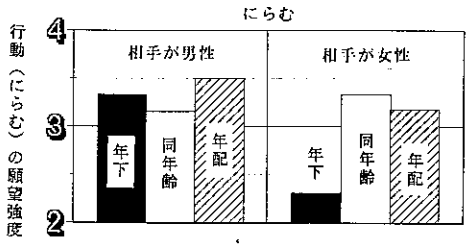

図18　映画館場面における『にらむ』行動の願望強度

考　　察

全体的に見ると，腹を立てたり，悲しい，憂鬱な気分になるが，問題となっている出来事を解決するために相手に直接文句を言ったり，椅子の背をけったりするといった積極的な行動はとらず，心の中で文句を言ったり，にらんだり，席を移動したり，といった消極的な抗議行動をとっていた。つまり藤森（1989）の抑制・個別型の方略，吉野(1987)の放置型の方略が多かった。従って，「相手が年下の時は直接行動で示し，年上の場合は不満を抑制するであろう」という仮説1は単純すぎて，支持されたとは言えない。

また仮説2の前半「同性に対しては直接行動で訴える」は，図7において男性の被験者においてのみ見出された。仮説2の後半「異性に対しては不満が抑制される」は図6において支持されている。しかしこの仮説も単純すぎて充分実証されたとは言えない。

また「相手に文句を言う」の項目の得点は，場面によって異なっていた。映画館場面や図書館場面は，電車場面よりも評定得点がやや高く，直接訴えようとする傾向がみられる。これは，社会的常識上，明らかに相手に非があるということから由来しているのだと思われる。静かにしていることが当然な公共施設で，話をすることは明らかに非である。相手に文句をいうのは正当なことだとうけとられるだろう。しかし電車場面は，相手に非があるとは一概に言えないと認知されているようである。

感情項目の得点で，電車場面は「腹がたつ」よりも，「仕方がない」の項目の得点がわずかに高い。そして電車場面の「失礼な人だ」の評定得点は，図書館場面・映画館場面の「マナーの悪い人達だ」の得点よりも低い。つまり電車場面は，他の2場面ほど相手に対して負の感情を生じさせないと言えるであろう。それ故「相手に文句を言う」の項目の評定得点が低かったと考えられる。

相手の年齢の効果は，感情面では電車場面での「憂鬱」の項目でみられた。また，図書館場面の「マナーの悪い人達だ」「腹がたつ」の項目では，男性の被験者のみに効果がみられた。「マナーの悪い人達だ」「腹がたつ」の評定得点は，相手が年上の場合に高くなる傾向にある。これは，年齢が上がるほど，社会的常識をわきまえているという認識があり，それから外れた行為をしていると，あるべき姿から外れた分だけ反感などの負の感情を強く生じさせるのではないかと考えられる。

しかし，女性の被験者の評定得点をみてみると，これは当てはまらないようである。女性の被験者は，相手が同じくらいの歳の人か年下の場合に高い評定得点を示し，年上の人である場合には，得点が低いという傾向にある。相手の年齢の効果は，男性の被験者と女性の被験者で現れ方が異なっているといえる。

相手の性別の効果で有意差がみられたのは，主に被験者が男性の場合であった。男性の被験者は，相手が男性である場合に「マナーが悪い」「腹がたつ」の項目の評定得点が高く，同性に対してより厳しい判断をしていると考えられる。

行動の願望水準において，男性の被験者では相手が女性である場合には不満を抑制し，相手が男性である場合には相手に直接不満を訴えたいとする傾向がみられた。一方女性の被験者は，このような一貫した傾向はみられなかった。女性の被験者は，直接的対処法のなかの「にらむ」「さり気なく体を押す」の2項目では，相手が女性の場合に得点が高かった。しかし「相手に文句を言う」の項目は，相手が男性の場合のほうが得点が高いという非一貫性がみられたのである。

感情の項目での効果の現れ方や，行動の願望水準におけるこのような非一貫性からすると，女性の場合は，男性とは異なり相手の性別には関係なく解決行動を決めているのではないかと思われる。

全体を通して感じるのは，場面の捉え方や，相手の特徴による効果の現れ方にかなり明確な男女差がみられることである。このことは，西脇（1990）の『(相手の性別の）効果が，男性の被験者において顕著である』という知見と一致している。男性の被験者の方が，相手の年齢や性別といった特徴，そしてその特徴に付随する社会的役割像に敏感なのではないかと思われる。

本研究では，相手の年齢・性別の効果が願望水準で現れている。そして，実行水準では相手の年齢・性別にかかわらず「相手に文句を言う」「にらむ」「移動する」等の項目が多く選択されていた。これは，大渕（1986）の『女性に対する攻撃は実行が抑制されやすい事が示されている。(略)それは，願望水準ではなく実行水準において働く効果である』という結果とは一致しない。また，西脇（1990）の『加害者が女性である場合，男性である場合よりも非攻撃的解決

や攻撃の抑制をする』といった結果とも一致しない。これは，怒りの程度の違いのためだと思われる。大渕の扱った場面は，“最も強い怒りを感じた経験”，西脇はかなり精神的・物質的被害が大きい場面を扱っている。本研究ではそれほどの怒りを喚起する場面を設定していない。このことから，怒りの程度によって効果の現れ方が異なってくると考えられる。

場面によって相手の年齢や性別の効果の現れ方が異なっているのは何故だろうか。場面の評定得点と効果の現れ方をみてみると，出来事そのものの重要性が，行動に何らかの影響を与えているように思われる。出来事の重要性が葛藤解決に影響をおよぼすことは，先行研究でも指摘されている(吉野, 1987)。葛藤解決行動を決定する際に，相手の年齢や問題の重要性，相手の態度等のさまざまな要因のなかで，どの要因を優先しているかということが，これからの課題となるであろう。

要　　約

社会関係を規定する最も一般的な要因である相手の年齢・性別が対人葛藤の解決行動を決定する際に及ぼす影響を調べるために，大学生を対象に質問紙調査を行った。場面の捉え方には，かなり明確な男女差がみられた。女性は憂鬱になり，ここに座らなければよかったと後悔する傾向が強く，席を移動する行動が強く望まれていた。これに対し男性は「マナーが悪い人だ」と憤慨し，相手に直接文句を言ったり，にらんだり，椅子の背をける行動をしたいと回答した。また，相手が年上の場合には不満の抑制を，相手が年下の場合には不満を直接訴えたいとする傾向がみられたが，これは男性の被験者において顕著であった。また，相手が同性の場合には，不満を直接訴えたいとし，相手が異性である場合には，不満を抑制しようとする傾向がみられた。男性の被験者は，一貫してこのような傾向がみられたが，女性の被験者は男性の被験者ほど一貫性がみられなかった。相手の年齢・性別以外の要因も影響していると考えられる。今後，葛藤解決行動の決定に，どのような要因が，どのような順序で影響を与えているかが研究課題であろう。

引　用　文　献

藤森立男　1989　日常生活にみるストレスとしての対人葛藤の解決過程に関する研究　社会心理学研究，4，618-628

池内　一　1971　コンフリクトの心理学　年報社会心理学，12，8-35

三上俊治　1976　コンフリクト研究の動向　―実験ゲームを中心として―　年報社会心理学，17，207-223

宮本友弘，山際勇一郎，田中敏　1991　要因計画の分散分析において単純主効果検定に使用する誤差項の選択について　心理学研究，62，207-211

西脇須摩子　1990　怒り・攻撃反応の要因分析　岐阜大学教育学部教育学科卒業論文

大渕憲一　1986　質問紙による怒りの反応の研究：攻撃反応の要因分析を中心に　実験社会心理学研究，25，127-136

Sillars, A. L. 1981 Attributions and interpersonal conflict resolution. In Harvey, J. H., Ickes, W., & Kidd, R. F. (Eds.), New directions in attribution reserch (Vol. 3). Hillsdale, NJ: Erlbaum Associates.

下斗米淳，飛田操，藤森立男　1988　対人葛藤の解決方略を規定する要因の研究　日本社会心理学会第29会発表論文集，162-163

吉野絹子　1987　対人葛藤の解決過程の分析(1)　―葛藤に対する反応パターンとその類型化―　社会心理学研究，2，35-44